

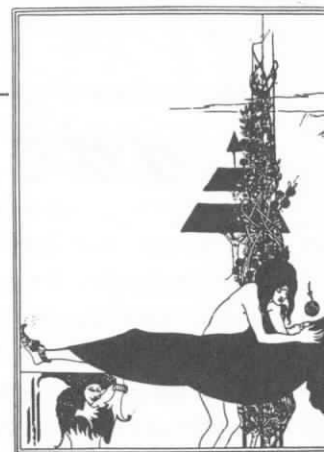
## マックス・ビアボウム 『過去を覗く』のワイルドについて

前川 祐一

(立教大学教授)

マックス・ビアボウムのエッセイ『過去を覗く』は、かつて華やかな存在であったオスカー・ワイルドという名前が今ではほとんど忘れられて、ワイルド氏は落魄の身をロンドン郊外チェルシーに養っている、それをジャーナリストあるいは文学研究者に成長したビアボウム自身が訪問するという架空の設定による探訪記である。この小冊子に編者ハート＝ディヴィスがつけた註によれば、このエッセイが書かれたのは1893年12月から94年の極く初期のことで、そのときマックス自身はまだ21歳のオックスフォードの学生であったし、一方ワイルドのほうは40歳になるかならずの若さで、しかも1893年といえばフランス語版『サロメ』出版の年であり、しかもロンドンでは『とるに足らぬ女』や『ウインダミア夫人の扇子』といった傑作が相ついで上演されて、それこそ得意の絶頂に登りつめていた時期であった。それをビアボウムが敢えて時代を20～30年後にずらし、結果的にはワイルドの将来を予告することになったにしても、このような架空の設定を思いついたのはどうしてであろうかというのが本論の主題である。

一方ここにマックスが1914年に書いた「バインズ館2号館」というエッセイがあって、これは1899年の春の一日、ロンドン郊外パトニイの仮寓に幽閉に近いかたちでワッツ＝ダントンとの共同生活をおくっていたスウィンバーンをマックスが訪問した、現実の訪問記である。若くして天才詩人の名をほしいままにし、輝かしい将来を約束されていたスウィンバーンが、アルコール中毒と同性愛というおぞましい世紀末の病に犯され、息子の身を案じる母親の懇請を受けた友人ワッツ＝ダントンが1879年6月のある日、瀕死のスウィンバーンを四輪馬車に乗せて拉致同様にここに幽閉し、外界との交渉をさえぎったというのがこの経緯で、以来スウィンバーンは1909年に死ぬまで、この家でワッツ＝ダントンに監視された生活をおくったのであった。そして興味深いことには「バインズ館2号館」に書かれたスウィンバーンの日常生活と、『過去を覗く』に書かれた老オスカー・ワイルドの生活のあいだには奇妙な共通点がうかがわれるのである。例えば老ワイルドもスウィンバーンも毎朝の散歩を日課とし、まるで判で押ししたような正確な時間で著述、研究の生活をおくっていると、ワイルドがなにか気のきいたことを言ったあとでくっくと自分だ



けが笑いこける癖があるというところは、「バインズ館2号館」では同席したワッツ＝ダントンがなにか言っては高笑いする癖がある点に反映されている。これは「バインズ館2号館」に『過去を覗く』の影響が著しいのだと単純にきめてかかってすむ問題であろうか。なるほど時間的には1914年に書かれた「バインズ館2号館」に1893年あるいは94年に書かれた『過去を覗く』の影響が影をおとすことは十分に想像できるのだが、前者は30ページにも及ぶ完結した、しかも実際の訪問に基づく訪問記であり、後者は僅か5、6ページのパロディ仕立ての架空のエッセイである。敢えてこのふたつのエッセイを比較検討するとすればどうやらここには逆の方向の影響関係が、すなわち『過去を覗く』に「バインズ館2号館」の影響を読みみたいというのがほくの推論である。

マックスが『過去を覗く』を書いた1893年頃といえば、スウィンバーンはパトニイに移ってすでに14～5年経っていたが、パトニイのスウィンバーンは依然ロンドン文壇の注視的であり、彼の日常生活にまつわる噂はそのたびに尾鰭がついて少なくとも文学関係者の口から口へとささやかれつづけていた。1893年の暮にマックスがワイルドのパロディを書こうと思いついたとき、マックスの前にはワイルドと同様同性愛の噂につきまとい、しかもかつては共にオペラ『ペシエンス』のモデルとして世評の矢面に立たされた格好の手本スウィンバーンがいたのであった。マックスのなかで現在のスウィンバーンの姿が将来のワイルドの運命とあざやかに重なり合って、チェルシーに隠遁した老ワイルドのイメージが、スウィンバーンの日常生活にまつわる噂を身にまとい生々しく出現したのであった。マックスに残された仕事は現在のスウィンバーンから現在のワイルドを眺めることであった。そしてこれはいわば『過去を覗く』ことにはかならないとマックスは考えたのである。

この暗い玄関に入ったここでは過去が現在であった。この壁面からはわたしが僅かに亡霊として知っていたあのロセッティの女たちが生々しい生きた姿でほうっと浮き出てきた

と、これは「バインズ館2号館」に一步踏み込んだときのマックスの印象であった。